

タウンミーティング 国際スポーツ大会等の誘致の推進について

日時：平成30年10月10日（水）18：00～20：00

会場：北九州芸術劇場中劇場

司会

本日、司会進行を務めさせていただきます、舩越悠佳と申します。どうぞよろしくお願いいたします。まずは私から、本日のプログラムをご説明させていただきます。

このあと、第1部としまして、北九州市長北橋健治より「北九州市の国際スポーツ大会等誘致の取り組み」について講演を行います。第2部では、日本女子長距離界で数々の素晴らしい成績を残し、現在はスポーツコメンテーターとしてご活躍の千葉真子様より、「スポーツで心も体も健やかに」と題しまして基調講演を賜ります。

それから10分の休憩を挟みまして、19時頃からパネルディスカッションを行います。パネリストには、北橋市長、千葉真子様、学校法人国際学園九州医療スポーツ専門学校理事 水嶋章陽様、公益財団法人日本オリンピック委員会名誉委員 赤木恭平様、コーディネーターとして、北九州市立大学地域戦略研究所教授 南博様にご登壇いただきます。パネルディスカッション終了後は、会場の皆様からもご意見をお伺いする時間を設けておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。終了は20時を予定しております。

それでは早速、北橋市長より「北九州市の国際スポーツ大会等誘致の取り組み」と題しまして講演を行います。北橋市長、よろしくお願いいたします。

市長講演

「北九州市の国際スポーツ大会等誘致の取り組み」

北九州市長 北橋 健治

皆様、こんばんは。お腹が空いていると思いますが、今日はスポーツの楽しいお話です。よろしくお願いいたします。

「スポーツを取り巻く現状と課題」というテーマですが、ラグビーワールドカップ、いよいよ来年であります。そして、その翌年には東京オリンピック・パラリンピックということで、国民の間でスポーツに対する関心が大きく高まっていると思います。また、北九州市出身のアスリートの皆さんも各界で頑張っておりますし、これから大いに盛り上げていきたいと思っております。

ここで1つ、文化プログラムというものがあります。選手の指導・育成、事前キャンプ、聖火リレーとあるわけですが、これはロンドンオリンピックでもそうでしたが、スポーツで集まる海外のお客様を文化でおもてなしする。それによって国のいろんな魅力を、例えばそれは食も含めてであります。精いっぱい文化面で発信をしようということの日

本政府も熱心に考えております。2020年オリンピックイヤーの文化交流都市は北九州市1カ所に決まっておりますので、そういったものも組み合わせながら考えていきたいと思っております。

私たちがスポーツに期待すること、目指す姿ではありますが、何と云っても様々なチャンスが生まれます。最高のアスリートに触れることはものすごく刺激になりますし、自分も何かやってみよう、みることにすることにもつながります。そして、応援しようという熱い気持ちでもって街の賑わいにもなるし、シビックプライドの醸成にもなると考えております。

さて、みるスポーツの機会を増やすということではありますが、これまで国際的なスポーツ大会の誘致に努めてまいりました。それは、北九州市の知名度向上へとつながります。例えば、アスリートの皆さん方は友人に「今、北九州市でこんな試合をしたよ。」ということをして SNS で発信していただけたと思うのですが、今は SNS の世界は非常に大きくて影響力があります。そういった意味で、街の知名度向上、イメージアップ、それがスポーツ振興にもつながりますし集客力にもなります。私たちの街の誇り、シビックプライドにもつながります。そこで、キャンプ地誘致あるいは国際大会の誘致ということで一生懸命やっているわけです。

そこで、最初のラグビーでありますけれども、現在世界ランキング3位は英国のウェールズであります。ウェールズと言ってもピンと来ない方が中にはいらっしゃるかもしれませんが、ラグビーの強豪国でありまして、石炭で非常に有名な、良質の石炭が採れる所です。「わが谷は緑なりき」というアカデミー賞映画がありますが、非常に感動的な土地柄と言いますか、ウェールズ人の人柄を描きだした映画で、コーラスが非常に有名な所だと聞いています。

そのウェールズにキャンプ地として選んでいただいたのが、本市なのであります。ウェールズには7万人以上が入る巨大なスタジアムがありまして、誘致のお願いをしているときに「ぜひ一度見に来てくれ」と言われたのですが、「いや、出張するときには大義が必要だ」と。つまり、「キャンプ地を北九州市にするとサインしてくれないと行けない」というお願いの仕方をしまして、「じゃあサインするからいらっしゃい」ということで、日本代表とウェールズ代表の熱戦がそこで展開されました。7万人以上いますからすごく暑いし、時にはブーイングだとか激しい野次でも飛ぶのかなと思ったんですが、実にラグビーというのは、紳士・淑女のスポーツだなと思いました。実に素晴らしい、感動的な試合だったわけでありまして。

そのチームは、3回に渡ってキャンプ地交流、事前交流をしたいと言ってくれております。既に元ウェールズ代表主将を中心にチームの方々に来ていただき、青少年の指導であるとか様々な交流を始めております。次は来年の3月、そして本番の直前と都合3回、ラグビーを通じたスポーツの交流、そして、北九州市でキャンプをしたというレガシーが人々の心に残るようということで、熱意をもってウェールズの皆さん方にやっていただいております。ウェールズ代表の紹介は、ラグビーファンの方には先刻ご案内でございますけれども、ウェールズはラグビーが生活の原点のような、文化の一部のような所でありまして、まさにラグビー大国であります。

ウェールズ交流プログラムではぜひ、青少年のスポーツファンはもとより、一般市民の方にもウェールズの文化、スポーツに触れていただき、未永くこの交流が続いていくことを期待しております。また、スナップ写真が残っておりますように本当にいろいろと参加をしていただき、特に今年は「わっしょい百万夏まつり」にチームの皆さん参加をしていただきました。シンボルマークの「レッドドラゴン」、赤い龍でウェールズをPRしているわけでありませぬ。

次に、国際スポーツ大会の誘致の取り組みであります。私どもいろんなご縁をたどって情勢を分析して、激しい誘致合戦が行われてきたわけでありませぬが、日本政府がホストタウンを決めましょうということになりました。つまり、あなたの都市はどの国のホストタウンになりたいのかということを出してもらって、審査をして、そして政府が認定をするという制度です。私どもは、いろいろ考えましてタイ王国のホストタウンに決まったわけでございます。

そこで、バンコクへ行きスポーツ公社の首脳陣と協定を結び、種目ごとに誘致をしてほしいということになりまして、卓球のチームがキャンプに来ることが決定しました。それからもう一つ、テコンドーのチームが事前キャンプをするということで協定を結んでおります。そのほか、水道でパイプのあるカンボジアであるとか、環境姉妹都市のスラバヤがあるインドネシアもありますが、災害がありましたので、タイミングを見てさらに広げる努力をしたいと思っております。

タイとの交流計画であります、やはり、スポーツを通じて相手の国を知る、理解する。そのスポーツを好きになる。そして、応援をして連携を深める。交流事業を定着させる。オリンピックが終わってからご縁があまり濃くない状況はよくありません。実は、森喜郎先生にスタジアムのオープニングの時にお越しいただきまして、その時にオリンピックのキャンプ地誘致の話をしてしましたら、「大事なことは、大きなイベントが終わったあとに長く市民と相手国との間で交流が深まっていくこと。このような継続的な友好関係を結ぶことが、まさにスポーツなんだ。オリンピック・パラリンピックの意義なんだ。」というご指導を頂いたところですが、まったくそのとおりだと思っております。

そこで、タイとの関係では、映画やドラマの制作でフィルムコミッションが大活躍をしております、タイの人たちにだいたい北九州市のロケシーンが伝わってきております。「ワンピース」などの日本の漫画も人気で、エコタウンや安川のロボット館などを回って漫画ミュージアムで漫画教室に入るといった交流を実施しております。未永く交流関係を続けていきたいという思いを込めて、タイと交流をしております。

次に、パラ・パワーリフティングという競技があります。特に下肢にハンディがある方、車椅子に乗っておられる選手が、台に仰向けになり脚を縛って動かないようにして、バーベルを一気に持ち上げるという競技であります。2年連続で、昨年は日本国内のジャパンカップ、今年はアジア・オセアニアオープン選手権大会、これに出ないとパラリンピックに出られないという大変権威のある国際大会を誘致しまして、この場所で、芸術劇場で世界大会を行いました。そういうことで、世界中からトップアスリートが来ましたので、ぜひパラリンピックでも、このパラ・パワーリフティングという競技にご注目いただきたいのであります。

国際スポーツ大会の実績は、ラグビーについては「ジャパンラグビードリームマッチ」ということで、世界最高峰のリーグに参加しておりますサンウルブズとトップリーグ選抜との試合がございました。山田章仁選手は北九州市のご出身で、すごいトライを決めてくれて大いに盛り上がりました。

また、7人制のラグビーがリオオリンピックから公式種目になっておりますが、これが東京オリンピックでも行われます。世界大会では世界各地を回るのですが、それぞれの国で1カ所しかこの大会を行わないということで、これまで2年連続、ミクニワールドスタジアム北九州が非常に素晴らしいとっていただき女子の世界大会を行いました。また先日、来年4月の開催も決定しました。今度は、福岡県と一緒に共催をしようという相談も始めております。というのも、高校生あるいは市立の小中学校というのは、県の教育委員会が深く関わっております。青少年の皆さん方には、格別の計らいで世界最高の女子7人制ラグビーを観戦してもらおうということで、バックアップしていきたいのであります。

他のスポーツでも、ダンススポーツのユース選手権を一度誘致しております。16歳から18歳の方々ですが、実にチャーミングで、ダイナミックで、そしてファンタスティックでありました。それから、卓球ジャパンオープン荻村杯。これは大変大きな大会であります。先日総合体育館で見事に大成功、男女ともに日本が優勝いたしました。中国のユースを破ったわけでありまして、早田ひなさん、北九州市出身の選手も頑張っております。地元の卓球協会の皆さんのサポートも高く評価をされまして、将来の誘致につながっていくことを期待しております。

また、これまで国際車椅子バスケットボール大会をやっておりますが、もう14回になりました。正直に申し上げて、一時は、スポンサーも含めてバックアップ体制についてどうしようかと迷ったときもありました。その時に、こんなに素晴らしい、北九州市発祥とも言えるようなスポーツの世界大会をここで終わらせてはならないという議論の中で、青少年にもっとこの素晴らしい競技を見てもらおうじゃないかということになりました。教育委員会にご賛同いただき、それから幼稚園でありますとか子どもたちも多く見に来てくれるようになり、そういった意味では、非常に良いチャンスになっているのではないかと思います。これは、今後も皆さんと一緒に続けていきたいと思っております。

スポーツの開催実績について、パラ・パワーリフティングであるとか女子セブンズ、これは選手の皆さんに学校を訪問し交流をしてもらっております。こういうのは良い印象が残っていくと思えますし、出前授業など本当によくやっていただいております。また、ユースでは、タイの卓球選手と日本とが試合をするといった交流もしております。

女子セブンズの場合、SNSの効果を改めて感じました。インスタグラムで90万人、フェイスブックで63万人、ツイッターで33万人、選手から発信されたということであります。この効果は大きいと思えます。

そして、私どもスポーツ大使をお願いしております。この間、女子レスリングの入江ゆき選手にもスポーツ大使をお願いいたしました。敬愛高校ご出身の柔道の吉田選手も世界柔道で抜群の成績でありましたけれども、何とかお願いできないかなと願っております。

今後の予定をお話しします。学研都市で「オリンピックデーラン」というイベントがございます。2 km程度のジョギング中心のイベントで、オリンピック出場経験者と一緒に走ったり様々なプログラムを通じて、オリンピックとスポーツの楽しさに浸っていただくという行事でございます。それから、ラグビーのウェールズ交流プログラムが来年3月にあります。続いてテニスであります。フェドカップ。大坂なおみさん、すごい活躍でありましたが、女子テニスの国別対抗戦の北九州市開催が決定いたしました。数年がかりでお願いしてきたんですけれども、テニス界の皆さんの熱い思いがようやく実りました。大坂なおみさん、来てほしいなと首を長くして待ちたいと思います。

そういうことで、これから女子セブンズもありますし様々な行事を行っていきます。いつまでもスポーツの感動、魅力、喜びというものが北九州市民のすぐそばにあるような、そういう街を目指してまいります。これが街の賑わいづくりやイメージアップ、活性化へとつながっていくと思います。そういう気持ちでこれからも取り組んでまいりますので、どうぞご指導ご鞭撻のほど、お願いしたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

司会

北橋市長、ありがとうございました。

続きまして、千葉真子様より、「スポーツで心も体も健やかに」と題しましてご講演を賜ります。千葉様は、1997年の世界陸上アテネ大会女子1万メートルで、日本女子トラック長距離種目初となる銅メダルを獲得されました。また、マラソン転向後は、2003年の世界陸上パリ大会でマラソンに出場し銅メダルを獲得。世界で初めてトラック、マラソンの両種目でメダルを手に入れました。第一線を退いた後は、ゲストランナーとして全国のマラソン大会に出場するほか、千葉真子ベストスマイルランニングクラブを立ち上げ、市民ランナーの指導や普及活動に積極的に取り組まれています。

私の方から簡単にご紹介させていただきましたが、より千葉様のことを知っていただくために、講演の前にまずはこちらをご覧くださいと思います。

(ビデオ上映)

それでは、千葉様にご登場いただきます。皆様、盛大な拍手でお迎えください。

基調講演
「スポーツで心も体も健やかに」

千葉 真子

皆様、こんばんは。

ご紹介をいただきました、マラソンランナー、そして現在はスポーツコメンテーターとしても活動しております千葉真子です。どうぞよろしくお願いいたします。

高校を卒業してすぐに九州の旭化成に入社したので、九州にも5年近く住んでおりました。試合とか合宿なんかで随分この地を訪れました。そして、2006年に新北九州空港マラソンということで、一度きりの滑走路を走るマラソン大会にゲストランナーとして参加をしたこともございます。そのあとに北九州マラソンができたということで、来年も2月に大会の開催が予定されているということですが、出場されたことがある方いらっしゃいますか。いらっしゃいますね。ちょっとお話伺ってみましょう。いつ走られたんですか。

男性

1回目と2回目。

千葉氏

すごいですね。フルですか。

男性

はい。

千葉氏

走り始めたきっかけは。

男性

北九州マラソンがあるので。

千葉氏

フルマラソン、走ってみてどうですか。

男性

走りきったあとに感動しました。

千葉氏

初めてだったんですか。

男性

はい。

千葉氏

初めてのフルマラソン、長いでしょう。長いんですよ、42.195 km。

私も初めてフルマラソンを走ったときは意識が朦朧となってしまって、歩いた方が早いんじゃないかと思ったぐらいでした。今も走ることは続けていらっしゃるんですか。楽しいだけではないと思うんですが、魅力は何ですか。

男性

走っていたら気分転換になるので。

千葉氏

なるほど。実はマラソンには、気分転換、リフレッシュにつながるなど、いろんな良い効果があります。体を鍛えると、体だけではなくて心も前向きになると言いますか、歩いたり走ったりすると必ず前に進んでいくじゃないですか。なので、気持ちも明るく前向きになったという生徒さんが実に多いんです。あとは、医科学的にもこのリズム運動、「イチ、二。イチ、二。」こうしてマイペースにできるようなリズム運動は、自律神経を整える効果があるということで、体だけじゃなく心も健やかになれるのではないかなと思います。

今日はせっかくなので、ラン&ウォークの裏技を皆さんと一緒にやってみたいと思います。立てる方は立ち上がっていただいて、一緒にやってみましょう。2月に北九州マラソンもごさいますので「する・みる・支える」、いろんなスポーツの形がありますけれども、するスポーツを盛り上げていくためにも、ラン&ウォークの3つの裏技を一緒にやってみたいと思います。

まず裏技1つ目、姿勢です。スポーツだけではなくて、お仕事されるときも姿勢は大事かと思いますが、皆さんお疲れだと思いますのでその場でちょっと伸びをしてみましょう。うーんと伸びをして、ちょっと体を横に揺らしながら伸びをしましょう。さらに、胸をこんなふうを開きながら息を吸って吐き出しましょう。息を吸いながら胸を開いて開いて、そして腕は自然に横です。そうすると、何かお腹の位置がぐっと上に上がったような姿勢になります。こんなに胸を張るのかと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、これが基本の姿勢になります。これがだんだん疲れて崩れてくると、腰がかくっと落ちてしまったり、あるいは、走っているとき腕が上がって背中が丸まってしまおう。こういう姿勢になりがちです。じゃあ、わざと猫背の姿勢をつくって、背中をちょっと丸めた状態で深呼吸してみましょう。どうですか。ちょっと入りづらいと思うんです。先ほどのように胸を開いていただくと、スムーズに呼吸も入りやすくなるわけです。ですから、歩いたり走ったりするとき姿勢が崩れてしまっていると、1人だけ高地でトレーニングをしているようなことになりまして、腰が落ちている状態だと膝にダイレクトに負担がかかってしまいます。頑張っている割には前に進んでいないなという方は、まず姿勢を正して

みてください。

そのときの裏技。腕をベルトの位置、横に添えてあげると美しい姿勢が意識しやすいです。これは、走りながら時々チェックをしてあげるといいと思います。姿勢を正すとき、5つも6つも糸でつられている感じとかいろいろ言われたら人間というのはぎこちなくなりますので、腕を一本添えることで姿勢をチェックしていただけたらと思います。

次に、裏技2つ目です。脚だけで走るのではなくて上半身を上手に使うことがポイントになります。陸上競技の競歩、今度東京オリンピックでもメダルが期待されていますが、ちょっとユニークな動きをします。このようかなり腕を振って、骨盤のローリングと言うんですけれども、例えば、右肘を引くと左の骨盤が前へと繰り出される。ちょっと一緒にやってみましょう。右肘を引くと、反対側の左の骨盤から足が前に出る。こういうメカニズムになっているんです。軽く肘を引いてあげるとスムーズに足が前に出やすいので、歩くときもできれば腕を軽く振って歩いていただくと、推進力につながるというわけなんです。あとは、足を前後に開いていただいて、腕をぶらーんと力を抜いてリラックスです。力を抜いた状態のまま軽く曲げます。かなり上の方でカーブ振ってしまっている方を多く見かけるんですが、こういう方に限って「なんか肩が凝るんです」とおっしゃいます。それは、力を入れすぎです。長い距離を歩いたり走ったりするときに、やはり楽じゃないと長く続きませんので、まずリラックスすることが一番大事です。力を抜いた状態で軽く曲げる。この辺で振ろう振ろうと思わずに、リズムを取る程度でいいです。リラックス、アンド、リズムを取る程度。2つのりを、腕振りのときには気を付けてみてください。

最後に3つ目です。呼吸法なんですけど、苦しくなったら息をしっかりと吐き出しましょう。ビギナーさんの中には、苦しくなると慌てて息を吸おうとされる方がいらっしゃいますが、吸おう吸おうと吸うことばかり意識するとなかなか上手に入ってきません。一度息を吐き出してから大きく吸い込むと深い呼吸につながるの、吐く方を強調していただくと上手に呼吸ができるんじゃないかなと思います。

ありがとうございました。ちょっと空いた時間に一步を踏み出していただいて、体だけではなく、心も生き生きと健康的な生活を送っていただければなと思います。オリンピック選手といたしますと、もともと特別な人なんじゃないかと思われるかもしれませんが、私は高校生から陸上部に入りまして、最初はレギュラーにも補欠にもなれず、次に、レギュラーの付き添いができる役があるんですけども、これにも入れず、最初はただ沿道で応援をするところから始まりました。本当に弱い選手で、高校の陸上部の人数が30人以上いまして、レギュラーに入れないので練習にも全くついていけませんでした。遅れてしまった分の練習は最初からやり直して、トラックのすぐ真横にサッカーゴールが置いてあったんですけども、そのサッカーゴールにぶつかって鼻血でも出たら先生は休ませてくれるんじゃないか、そんなことを考えるくらいものすごく心の弱い人間だったんです。でも、何が何でもレギュラーを目指すんだ、目の前の小さな目標を積み重ねていくことによって、自分が全く思いもしなかったオリンピック、世界の舞台に通ずることができました。

そして、学生時代の私は自分に自信が持てない生徒で、実は自分の声が大嫌いだし

た。ですから、こうして人前で話すなんてとんでもないことで、教室で先生に指されても顔中が赤面して涙が出てきてしまうような、そんな内気な少女だったんです。でも、自分が一生懸命できるこの「走る」ということに出会ってから、走っているときだけは自分が少しだけキラリと輝けるような気持ちになって、それが積み重なって行って少しずつ自信が持てるようになったんです。人はこんなに変わることができるんだな。そんな素晴らしい体験をさせてもらいました。

こうして講演をする中で、よく挫折した時のことを聞かせてほしいというリクエストがあります。私は、オリンピックに出たことがあります。オリンピックに出られなかったという経験もしております。その時ばかりは自分の陸上人生を全否定されたような気持ちになり、何も考えられず頭が真っ白になってしまいました。誰にも会いたくなくて、1週間くらい引きこもりの状態でいました。そんなある日、いつものジョギングコースに走りに出かけたんです。そこで初めて、オリンピックの時にいったい私は何をやっているんだと、ふと考えました。初めて一粒ポロリと涙がこぼれたんです。オリンピックでは補欠の選手になってしまったけれど、自分の人生の主演は自分なんだから、自分の人生を明るく前向きに一步踏み出していこうじゃないか。そんな風に考えることができたんです。

後で振り返ってみて、何であの時あんな風に考えることができたのかなと思ったり、もしかしたらジョギングをしていたからなんじゃないかなと思ったんです。先ほども言いましたように、歩いたり走ったりすると必ず前に進んでいるので、考え方が後ろ向きになることが少ないのかもしれないかもしれません。そうした経験を通して、引退したあと、スポーツで世の中を明るく元気にできるような活動をしていけたらなという思いに至りまして、今の活動へと続いているのではないかと思います。

このあと、パネルディスカッションもごさいます。そこでもスポーツの誘致についてお話をしていきたいと思っておりますけれども、北九州マラソン、非常に素晴らしい大会だと聞いております。私はまだ1回も参加をしたことがないんですけれども、ネット上で「ランニング100撰」というサービスがございまして、日本全国のランニング大会のランキングを付けていくんですが、実はこの100撰に入る大会はものすごくレベルが高いんです。しかも、大会に点数が付くシステムになっておりまして、この北九州マラソンは87.4点という素晴らしい評価が付いています。

何が素晴らしいかというと、給食でその土地のおいしいものが頂けるところです。ランナーは食いしん坊なので、給食でいったい何が出るのかすごく楽しみにされている方が多いんですけれども、小倉牛がパックで出てくるんですね。大体、給食というと一切れぐらいのちょっとしたおつまみ程度なんですけど、これがパックで提供される。これは画期的ですね。さらに、ボランティアの方がものすごく元気がよくて、運営がスムーズだという評価も非常に高かったです。こういう支えるスポーツというのもマラソンには大事なので、このあとのパネルディスカッションでそういうお話もしてまいりたいと思います。

それでは、ありがとうございました。一度失礼いたします。

司会

千葉様、ありがとうございました。

では、これより 10 分間の休憩となります。19 時よりパネルディスカッションを行いますので、お時間までにお席に戻られますようお願いいたします。

パネルディスカッション

<u>パネリスト</u> ：公益財団法人日本オリンピック委員会名誉委員	赤木 恭平
学校法人国際学園九州医療スポーツ専門学校理事長	水嶋 章陽
スポーツコメンテーター	千葉 真子
北九州市長	北橋 健治
<u>コーディネーター</u> ：北九州市立大学地域戦略研究所教授	南 博

司会

皆様、お待たせいたしました。これより、パネルディスカッションを開始いたします。パネリストとコーディネーターの方は、ご登壇をお願いいたします。

(登壇)

ではここで、このお時間からご参加いただきますお三方をご紹介します。

まず、公益財団法人日本オリンピック委員会名誉委員 赤木恭平様です。赤木様は、2002 年、国際オリンピック委員会がオリンピックの普及・発展に顕著な功績を残した個人・団体に対して授与するオリンピックオーダーを受賞し、その翌年には勲四等瑞宝章も授章されています。このほか、公益財団法人笹川スポーツ財団理事、公益財団法人日本スポーツ協会参与、公益財団法人全日本ボーリング協会名誉会長なども務めており、スポーツの発展にご尽力されています。

そして、学校法人国際学園九州医療スポーツ専門学校理事長の水嶋章陽様です。水嶋様は、2006 年、学校法人国際学園の理事長に就任されました。このほか、現在は公益社団法人全国野球親交会理事、公益社団法人日本ボディビル・フィットネス連盟理事、公益財団法人日本健康スポーツ連盟理事長、公益社団法人日本スカッシュ協会役員などにも就任されており、スポーツの振興にご尽力されています。

続きまして、パネルディスカッションのコーディネーターを務めていただきます、北九州市立大学地域戦略研究所教授の南博様です。南様の専門分野は都市政策であり、北九州市スポーツ推進審議会の副会長、北九州市大規模国際大会等誘致委員会検討会議の委員、福岡県行政改革審議会の委員、関門海峡日本遺産協議会の会長なども務めていらっしゃいます。

以上の皆様と北橋市長、千葉様にて、パネルディスカッションを行います。これよ

り、コーディネーターの南様に進行をお願いしたいと存じます。よろしくお願ひいたします。

南氏

それでは、早速パネルディスカッションに入っていきたいと思います。

前半は、北橋市長と千葉様にご講演をいただいたところでございますが、パネルディスカッションでは、国際スポーツ大会等の誘致に対する考え方についてパネリストの皆様にお話いただくと考えています。大きく4つの論点に分けてお話いただくことを予定しております。市民の皆様が、北九州市における様々な取り組みについてお考えいただくきっかけになればと考えておりますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

まず、先ほどの市長のご講演にもありましたが、トップアスリートが参加する国際スポーツ大会を、北九州市のような地方都市と言いますか、首都ではない地方で開催することの意義などについて、各パネリストの皆様からお話いただきたいと思います。

まず初めに、北橋市長からお願ひいたします。

北橋市長

先ほども少し申し上げましたが、やはり、スポーツの喜びや感動を、国際的なアスリートや大会に触れることによって改めて感じると思います。私は中学校の時卓球部だったんですが、中国の前陣速攻で日本卓球が全部負けてしまいました。50年前のお話で、世界が終わったくらいの絶望感に浸ったわけでありますが、総合体育館での荻村杯で見事日本の男女が金メダルを取ったときには、本当に嬉しくて感動いたしました。やはり、こういう感動というのは、アスリートを目の当たりにすることによって大いに感じると思います。

それと、女子セブンズやウェールズのチームなど、いろいろな所でアスリートの方が北九州市に来られますと、学校訪問したり青少年と直接言葉を交わしたり、手ほどきをしたりしてくれます。これは、子どもたちにとって一生忘れられないような良き出会いというか、感動があると思うんです。青少年の健全育成というのは、地域にとって大変ありがたいことです。

そしてまた、荻村杯では、卓球協会と地元の方々の方々のボランティアスタッフ、学生さんやいろいろな方々のサポートによって大成功を収めまして、北九州市の受け入れがいいということで非常に高い評価を頂きました。これはまた次のチャンスにつながるかなと思って大変喜んでいるんですが、やはり大きな大会を実際に企画し運営いたしますと、たくさんの方々の協力がないと回りません。その意味で、地域で、これはスポーツに限りませんが、ボランティアのネットワークが強くなっていくのではないかと思います。そして、地域のコミュニティの絆がより深まっていく感じがします。そういった意味で地域にとってありがたいと思っています。

結びに、やはり今北九州市にとって、どの地方都市でも同じだと思うんですけども、いかにしてその魅力を発信するかが重要です。多くの方に訪問してほしいし、企業も投資を考えてほしいと願っているわけです。

そうしたとき、今は SNS の時代で、アスリートたちはたくさんのフォロワーを持っています。世界的なアスリートから「北九州市でこういう試合をした。すしは最高だった。食べるものおいしい。いい所だ。」こういう話がどんどん発信されることは、北九州市のイメージアップにとって絶大なる効果があると思っております。そうした意味で、国際スポーツ大会は大きなメリットがあると感じています。

南氏

ありがとうございました。

それでは続きまして、国内外で大変ご活躍で、日本オリンピック委員会でも名誉委員を務めておられます赤木様からお話を頂ければと思います。

赤木氏

今、市長からいろいろお話がございましたが、2年ぐらい前になりますか、日本オリンピック委員会と北九州市が、スポーツに関するパートナー都市協定を締結いたしました。九州では3番目だと思いますけれども、そういう新しい時代に向かったの計画が着々と進んでいるわけでございます。

そして、北九州市は大きな五つの市が合併した市で、それぞれが十分立派な体育施設等を持っていたということでございます。これは、他の合併した市町村とまた違いました、素晴らしい施設が整っているわけでございます。そういう意味で、この活用も含めて、あとはいかに招致、招き入れるかということでございます。

スポーツの振興についてはどこも皆考えているわけでございますけれども、特に北九州市はこうだ、アクセス面においてこうだ、あるいは、先ほどもお話がありましたように食べ物などあらゆるものがこうだと、もっとPRしていく必要があるのではないかと思います。受け入れる施設はもう十分あると思います。また、先ほども市長の話にありましたように、ラグビーの合宿であるとか交流、こういうものがこれから非常に盛んになっていくだろうと思います。そういうことを受け入れる入れ物は十分あると思っておりますので、楽しみに思っております。

南氏

ありがとうございました。

それでは、次に千葉さん。先ほどのご講演でも、世界各地でいろんな大会に出場されて、また、旭化成でも活動されていたというお話がありましたけれども、トップアスリーの視点から、この国際的なスポーツ大会を地方の都市で開催する意義、メリット、そういったことについて改めてお話を頂ければと思います。

千葉氏

今日、私は北九州空港から来たんですけども、非常に近いですね。さらに、福岡空港もアクセスが良いということで、やはりこの立地の良さは国際大会にもってこいだなと思います。選手の立場としては、やはりアクセスが良いとコンディションを保ちやすい

ものですから、大きな利点だと思います。

そして、スポーツだけして帰る人っていなくて必ず宿泊もしますし、ドクターやコーチなど関係者が多く来て飲食をしてお土産を買って帰ったり、経済の活性化にもつながっていきますよね。

観光の場合は、なかなか交流が生まれるところまでつながることは少ないと思うのですが、「スポーツには言葉は要らない、国境はない。」と言われるように、やはりマラソンなんかだと、スタートラインに立つだけで皆が同じゴールを目指していく仲間なんです。ですから、心の交流なんかも生まれやすいです。会ったこともない人たちから応援されるだけでも嬉しいですし、そうした感動がある場所には人は帰ってくるんです。リピーターが生まれやすい状況になると思います。そして、良かったから今度は合宿にも来てみたいねというように相乗効果が生まれて、様々な良い効果が発生するのではないかなと思います。

南氏

ありがとうございます。北九州市のアクセスの良さ等についてお褒めいただきまして、誠にありがとうございます。

それでは、その北九州市で人材育成、あるいはスポーツの支援などに積極的に関わっておられます水嶋様から、国際スポーツ大会開催の意義などについてお願いしたいと思います。

水嶋氏

ただ今ご紹介にあずかりました、九州医療スポーツ専門学校の水嶋です。

私も3年前に、ボディビルのアジア大会を西日本総合展示場で開かせていただきました。プロのアスリートはギリギリの状態まで自分を追い詰めて、プロフェッショナルとしてどう自分を見せるかということに集中しています。

それをサポートする立場として、最初の準備、アクシデントの際の緊急対応、片付け、喜び合いなど、西日本総合展示場でのアジア大会は大変でしたが、学生にとっては勉強になったと思います。これは、ただ勉強するのではなく感じながら学ぶ、本当の意味での学びだと思います。そして、こういう国際大会が北九州市であることは、若い人がそういうことを経験できるということにおいて、将来に向かって社会が良くなるきっかけになると思っております。

南氏

ありがとうございます。

今、水嶋理事長からも、教育面で学生にとって非常にプラスになったといったようなお話を頂きました。特に、水嶋理事長の経営されておられる学校では、スポーツをサポートするということにより深く取り組んでおられるわけですが、私ども北九州市立大学でも、例えば、私の授業を受講している学生を先ほど市長のご講演でもありました「ワールドラグビー女子セブンズ」に連れて行きました。国際大会を観戦者としてみるという観点

からも非常に感動しておりましたし、ミクニワールドスタジアム北九州のアクセスの良さですとか、スタジアムの設備というものにも感動しておりました。そうした形で、国際スポーツ大会開催の意義というのは、様々な視点から様々なものがあるということ、パネリストの皆様にお話を頂けたかなと思っております。

それではその国際スポーツ大会、大きなものはいくつもありますが、その代表格の一つといえばやはりオリンピック・パラリンピックではないかと考えます。2年後には東京オリンピック・パラリンピックが迫っているという状況でございますが、東京都だけではなく、あるいは首都圏だけではなく、全国で様々な効果が期待されているかと思えます。

そこで、東京オリンピック・パラリンピックが地方にもたらす効果として、パネリストの皆様方がどのようなものを期待しておられるのか、あるいは考えておられるのかお聞きしたいと思います。

まず初めに、日本オリンピック委員会に関わっておられます赤木様のお立場から、地方における効果や地方に期待することをお話しいただきたいと思えます。

赤木氏

50年経ちまして、日本で再びオリンピックということでございますが、ちょっとその前に、もう新聞でご存じかと思えますが、国際体操連盟の渡辺さんが北九州市のご出身でございます。昨日ブエノスアイレスで行われた国際オリンピック委員会の総会で委員に選考されました。

実は、国際オリンピック委員会の委員というのは、現在は日本オリンピック委員会の会長である竹田さんただ1人になっておりました。そこで渡辺さんが、これは競技者団体の代表ということから選ばれた委員でございますが、いずれにしましても日本の方で2名ということでございます。

国際連盟、それぞれのスポーツのIFと言っておりますけれども、国際連盟の会長に日本の方がなるというのは今まで非常に少なかったのです。卓球の荻村さんがなったあとは、オリンピック種目で会長になられた方はおりません。やっと渡辺さんがなられたということでございますけれども、渡辺さんの故郷が北九州市ということで、これは非常に素晴らしいことだと思いますので、皆さん誇りを持っていただいてよいのではないかと思います。

IFの会長、世界の競技者団体の会長というものは、日本の方はなかなかありません。語学の問題もありますけれども、それよりも何よりも、これはオリンピックそのものが元々は貴族社会のスポーツでヨーロッパ主体のものでございますから、未だかつて、国際オリンピック委員会の会長はヨーロッパとアメリカ以外からは出ておりません。

また、実は一つ問題がありまして、オリンピックを招致しましたけれども、東京都中心に招致するような形になっております。ラグビーのワールドカップは日本という国全体で受けるということで、各地方においても競技が行われるし、それなりに地方における効果があるのです。

ところが、オリンピックはご存じのように都市型でございます。都市の予算とかそういうものはどこも今極めて厳しいので、立候補する所がないという状況が起きてきている

わけです。そこで、やはりこれがラグビーであるとかサッカーのように国で受けるという形になれば、さらにスポーツの振興と言いましょか、そういうものが変わっていくだろうと思うわけでございます。オリンピックは、地方での合宿とかそういう効果はありますけれども、実際に競技するのは東京中心なのです。そこが他の大会と違うところです。

ですから、今後オリンピックの未来というものは、国が受けてこの辺で、関東地区全部あるいは関西地区全部でやるというようなスタイルになっていかないと、厳しいものになっていくだろうと思うわけです。ですから、これは様々なことが議論されておりますけれども、私はそういう形のものになっていくべきではないかなと思います。

今度も、2020年のオリンピックで聖火が全国を回ります。今まで、聖火は100日間かけて回るという規定があったのですが、今度は「東北を十分回ろうじゃないか」ということで、130日くらいに日にちが延びました。聖火がもっと小まめに回るということ、それは要するに、東京でやるんだけれども、やはり日本中で熱くならなければ成功しないし、また、オリンピックのレガシーとしても残らないということになるわけです。

ですから私は、各国が来て合宿をする、そのあと交流がされるあるいは旅行に来る、そういうところが非常に大事なのではないかなと思います。特に、日本は非常に治安が良い国です。我々はそういう点が日本の誇れるところだと思っておりますので、十分にそれを活かした上でオリンピックの招致、あるいはそういうイベントの招致をやっていけば良いのではないかなと思います。

長くなりましたけれども、以上でございます。

南氏

ありがとうございました。

それでは、今お名前が出ました千葉さん。オリンピックに実際に出場されたご経験をお持ちですけれども、オリンピックがもたらす効果ですとか、そういったことについてお願いします。

千葉氏

赤木先生から治安のお話がありましたが、選手村の外に出てはいけないという指令が出るくらいで、私は先ほども言いましたように最初から強い選手ではなくて、何と初めての国際大会がいきなりオリンピックでした。「オリンピックには魔物が住んでいる」という怖いことを聞かされまして、緊張のあまり、練習以外の時間は部屋の隅ですっとゲームをしておりました。

緊張をほぐしてくださったのが、ボランティアの皆さんのふとした笑顔であったり、約8万人の大観衆でした。大観衆に圧倒されて400mトラックを25周、合計で1万mを走るんですけれども、私が走るたびにカメラのフラッシュが先導してくれるような形で、苦しさを忘れるくらいの大観衆でした。選手と観客が一体になってスポーツを生み出すということはこういうことなんだという、オリンピックの醍醐味をそこで体感しまして、テレビには映らない空気感というようなものがオリンピックの舞台にはあるんです。

そういうものを体感して、ぜひこれをたくさんの人たちにオリンピックの舞台に立って、生で体感していただきたいなと思いました。

出場するのは選手の皆さんなんですが、自国開催だからこそいろいろな形で参加できるのが今度の東京オリンピックなのかなと思います。前回の夏季大会はリオでしたから地球の真裏でなかなか参加することができなかったと思うのですが、今度は事前合宿にもいろんな国の方がいらっしゃいます。

ちょっとした笑顔でも外国の方はすごくリラックスされると思いますし、マラソンで言いましたら神戸マラソンという大会があって、選手の皆さんお一人お一人に子どもたちが書いた手紙が渡されます。市民ランナーとはいえマラソンを走るのはすごく勇気が要るんですが、その手紙に癒されて頑張れるというランナーもいるということです。お金をかけなくてもおもてなしできるようなシステムを作って、地方の皆さん方もいろいろな形で参加ができるような取組みをやっていってもらえたらなと思います。

南氏

ありがとうございます。

それでは続きまして、水嶋様のお立場から、オリンピック・パラリンピックがもたらす効果についてお願いします。

水嶋氏

私、昭和 36 年生まれなんです。そして、3 年後のちょうど 3 歳の時に東京オリンピックがあったということで、父親が連れて行ってくれたとは聞いているんですが、覚えていません。私にとって、オリンピックに出た人というのは雲の上の存在なんです。特に、私はスポーツも勉強も何ら特化したものがありません。

その中で、九州医療スポーツ専門学校では、スポーツと医療を学んでいる学生がスポーツ選手をどうフォローするかということで、オリンピックは夢のある最高峰の舞台であるため、以前から本校を卒業したトレーナーにぜひオリンピックに参加してもらいたいと思っていました。実は、ロンドンオリンピックで、本校の柔道整復学科の教員である谷口先生と社先生がモンゴルのレスリング代表のトレーナーに付きました。また、今年の平昌オリンピックでは、本校の卒業生である出水トレーナーが宮原知子選手と宇野昌磨選手に付き、宇野昌磨選手が銀メダルを取りました。

平昌は隣ですから、実は、団体戦と個人戦の間にこっそり北九州市に来て、宇野選手は小倉のフグを食べて帰りました。宮原選手は実は股関節を痛めていて、復活が厳しいところをトレーナーが入って良くなり、それでオリンピックに出場できました。今回は 4 位でしたけれども、小倉牛をしっかりと食べて 4 位を取ってくれたのかなと思います。オリンピックの夢というものは、届かないのではなく、そこに参加することができるものだと思っています。

その舞台に私は立ったことはないんですが、平昌に行った出水トレーナーは、一緒に旗を振りながら開会式を歩いているんです。その時の写真を見せてくれたんですが、本当にきらびやかというか、世界各国の人々が本当に一つになっているという感じがしまし

た。ああいう現場をみることができるということは、日本の未来をつくる、元気をつくるという意味では本当に素晴らしいことだと思っております。また、そういうトレーナーをどんどん輩出していくことが、私たちの夢であります。

南氏

ありがとうございます。

それでは、北橋市長から、オリンピック・パラリンピックがもたらす効果に期待することについてお願いします。

北橋市長

日本オリンピック委員会と協定を結ばせていただき、いろいろと温かいご高配にあずかっているわけですが、その中の大きな目標として、ぜひ北九州市にオリンピックアスリートを派遣していただきたいという思いがあったわけであります。早速そうした思いにこたえていただき、フィギュアの小塚崇彦さんと競泳の宮下純一さんをはじめ、多くのオリンピックアスリートに本市にお越しただけるようになってまいりました。

まずは、12月1日に学研都市で、「オリンピックデーラン」と呼んでおりますけれども、2 km程アスリートと一緒にジョギングをするとか、様々な楽しいプログラムを企画しておりますので、ぜひオリンピックアスリートの皆さんと交流をしてほしいなと思っております。オリンピックというのは、そういう夢を持たせてくれるものだと思います。

それから、キャンプ地誘致などを通じて、オリンピックが終わったあとも外国との友情というか、連帯感というものが保たれることが大事だと思いますが、そういう意味で、青少年の皆さんにとってこれほど夢と感動を感じる舞台はそうないと思います。そういった意味で選手にとっても良いことなので、できるだけ多くの方にそういう出会いの場所ができるように努力をしたいと思っております。

先ほど、ロンドンオリンピックの時に文化のオリンピックを目指す動きが活発だったという趣旨で、東アジア文化都市の話をしさせていただきました。2020年のオリンピックイヤー、この約1年近い期間をかけて、日中韓文化大臣会議だとか、開会式・閉会式にはトップアーティストが北九州市にやってきます。

2020年、年間を通じてスポーツの感動を求め多くの方が日本に来られると思いますが、食も含め文化イベントをたくさんやってとにかく楽しんでいただき、そういうふうに北九州市を盛り上げていきたいと考えて東アジア文化都市に応募しました。それが認められましたので、スポーツの感動と同時に、多くの外国人の方に北九州市の文化、アートのイベントにもお越しただく、そういう相乗効果を期待しているところです。

4K8K テレビが間もなく開発され、早く比較的手頃な値段で発売されることを期待しているのですが、東京オリンピックを見た頃の白黒テレビとは全然違います。ものすごい迫力であります。今まで、きめ細かな動きをカメラが追いますと粒子が粗くうまく撮れなかったのが、今はパーフェクトに、実にきめ細かくテレビ画面に映すことができる、そういう4K8Kテレビでございます。

そういう技術革新によって、スポーツの迫力が醍醐味になってくるのではないかと思います。

います。そういった意味でもみる楽しみ、そして、自分も何かスポーツをやってみよう、仲間をつくって健康寿命を延ばすぞと、市民みんながスポーツで前向きな気持ちになっていくことを期待しております。

南氏

ありがとうございます。それでは、次のテーマに移りたいと思います。

本日、千葉様にお越しいただいておりますが、近年マラソン大会が各地で行われる中、マラソンを通じた街の活性化についても注目が集まっているのではないかと思います。例えば、北九州マラソンも、今年はタイ王国から招待選手がお見えになられて好成績を残されました。国際的な要素も兼ね備えていると思います。

こうしたマラソンを通じた街の活性化について、まず北橋市長から北九州マラソンの実績ですとか成果、そういったことについてお話しいただきたいと思います。

北橋市長

随分前から、北九州市で市民マラソンができないかという声は多くありましたが、これは警察当局をはじめ、多くの方のお力を借りないと達成できないビッグイベントでございます。なかなかその壁を乗り越えられなかったのですが、市制50周年という大きな節目があり、その時にぜひとも一度やらせていただきたいと各方面にお願いしまして、じゃあやるかということで北九州マラソンがスタートしました。

今年は第5回目の大会がありましたが、全国から1万人を超えるランナーが集まりました。市民の方が4割強、県内の他の市町村から来られる方が3割弱、そして全国、あるいは外国から参加をされる方が約3割と、各方面に大変素晴らしい発信ができたものと感謝しております。

その成功は、多くの方の支援があったからこそでございます。陸上競技の皆様、警察やスポンサー企業の皆様、そして5千人を超えるボランティアの皆様にお集まりいただき、素晴らしいおもてなしでもって大会を盛り上げていただきました。大会終了後、多くの方から「気持ちよく走れた」「温かい街だ」といったお褒めの言葉をいただきました。街の知名度向上、イメージアップに随分と寄与していただいたものと思います。

来年は2月17日でございますけれども、ぜひこれからも多くの方にご参加いただきたく思います。私も、始めるときに苦労した産みの苦しみを多少知っておりますけれども、本当にボランティアや多くの方々のご支援のおかげさまだと思います。市民の絆によって生まれたビッグイベントでございますので、未永くこれが続いていくことを切に願っております。

南氏

ありがとうございます。

続きまして、千葉様からランナーのお立場として、マラソンを開催する自治体、あるいは市民の方に期待することがありましたらお願いします

千葉氏

私も世界各国、そして全国各地のマラソン大会に参加させていただき、感じるのは回を重ねるごとに街が一丸となっていくということです。ボランティアや応援、そして警備の方ですとか、大会に関わるいろんな人たちの横のつながり、チームワーク、そして絆が回を重ねるごとに深まっているなと感じています。

新しいことを生み出すには警察の許可ですとかいろいろ大変な準備があると思いますし、エネルギーがいることではありますけれども、その分レガシーが生まれてくるのではないかと思います。いろんな国際大会の誘致なんかも楽しみですけれども、ぜひ北九州マラソンをいずれ国際マラソンにさせていただければ、より盛り上がっていくのではないかなと思います。その際は、ぜひ私をゲストランナーによりしくお願いいたします。

南氏

ありがとうございます。

それでは、最後のテーマに入っていきたいと思います。最後のテーマは、スポーツに関する連携協定についてです。

北九州市は2016年12月、オリンピックムーブメントの推進や国際競技力向上、スポーツ振興事業の展開などを目的として、日本オリンピック委員会とパートナー都市協定を締結しました。先ほど、赤木様からもこの点について少し触れていただきました。また、2017年5月には、スポーツの振興、スポーツによる街の賑わいづくり、人材育成などについて連携協力するため、九州医療スポーツ専門学校とも包括連携協定を締結しております。そこで、日本オリンピック委員会と九州医療スポーツ専門学校、それぞれのお立場から、協定の意義と自治体に期待することについてお話を頂ければと思います。

それでは、赤木様からお願いいたします。

赤木氏

先ほども少し触れました、日本オリンピック委員会とのパートナー都市協定。これは、私も協定の時にいろいろとご協力を申し上げたわけですが、実は、九州ではパートナー都市協定を締結していたのは福岡市と熊本市だけでした。九州では、北九州市が3番目ということになるわけです。市の方では、早くから何かそういうものはないかと模索をされておりました。そういうことを伺いまして、ぜひ早急に協定を結んだ上でオリンピックが教室をやったり、あるいは市民と一緒に走ったりと、そういうことがこれからの地域スポーツの振興には重要だということで、やったわけですが、例えば、柔道の場合であれば、柔道教室でオリンピック選手と一緒に柔道をやったということで、子供たちはこれを生涯忘れることがないだろうと思います。

先ほども千葉さんがおっしゃいましたように、スポーツというのは「する・みる・支える」という3つからなっているわけですが、市はなんといっても支える一つの大きな力でございます。そして、市民の皆さんがみて感動し、その中からアスリートになろうという子どもたちが出てくる、これが理想的な姿だろうと思います。そういう意味で、形は整ってきていると思います。あとは中身の問題だと思いますし、こういうイベントを通じ

て市民スポーツがますます盛んになっていくことを願っております。

いま隣にいる水嶋さんの学校は、「ZERO100」ということを唱えていらっしゃいます。これはオリンピックとは少し離れますが「0歳から100歳まで」という意味で、市長もおっしゃいましたように、健康寿命をいかに延ばしていくか。これは、やはり市民スポーツを通じてやっていく以外ないだろうと思うわけです。巨額の医療費をかけている日本ですが、「死ぬまで元気でお世話にならない」「自分で何もかもできる」というような体、健康づくりをしていくことは非常に大事だろうと思います。

そういうことになっていけば、スポーツの効果は本当に大きいと思っております。私たちはそういうことを願っております。

南氏

ありがとうございます。

それでは、続きまして水嶋様からお願いします。

水嶋氏

いま赤木先生に触れていただきましたが、うちの学校のビジョンとして「ZERO100プロジェクト」ということを言っています。「ZERO100プロジェクト」とは何か。競技のスポーツというのは、先ほどから言っているとおり、感動や目に見えないエネルギーというものを与えてくれます。それと併せて、もう一つのスポーツとして生涯スポーツがあります。例えば、Jリーガーになった方は5月、6月の春生まれの方がとても多いです。これは僕の想像なんです、小学校1年生くらいの時、早生まれの人と遅生まれの人の体力の差って相当なものがあるんです。その時に自分が負けている、自分は運動能力がないんだと勘違いした子どもたちが運動嫌いになってしまう。これを防ぐことがトレーナーの役割だと思っています。

また、高齢者の間で盛んに言われております予防というものについて、運動や食事によってどれだけ健康になれるか、こういう生涯スポーツの指導員を養成することも、九州医療スポーツ専門学校の「ZERO100プロジェクト」のテーマの一部です。そして、北九州市の中でプロフェッショナルをつくるということが私たちのビジョンです。

そういう意味において、今回の北九州市との包括連携協定は本当に感謝する気持ちと、北九州市の中でどれだけ貢献できるか、北九州市の中でどれだけの人材が育っていくか、そういうことの実感を感じています。感謝の気持ちと併せて、責任と義務というものをしっかり感じながら頑張っていきたいと思っております。

南氏

ありがとうございます。

それでは、最後に北橋市長に行政のお立場から、包括連携協定ですとかそういった協定の意義と期待する効果などについて、お話をいただきたいと思っております。

北橋市長

オリンピックのキャンプ地誘致をはじめ様々な活動をしておりまして、日本オリンピック委員会からは本当に温かいご高配を賜りまして、今日に至っているわけでございます。オリンピックアスリートに来ていただけるようになるとか、いろいろな形がありますがけれども、これからもどうぞ皆様方のご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げたいと思っております。中央と直結していると学ぶことが多く、大切なヒントを得ることもできますし、またお願いをすることもあろうかと思っております。

そしてまた、地域の発展のために学校が果たしている役割は大変大きいと思います。水嶋理事長の九州医療スポーツ専門学校でありますけれども、ここの卒業生の方には、誰もが知っているような、日本の超一流のアスリートのスポーツトレーナーの方がたくさんいらっしゃるということです。そして、いろいろなスポーツ行事の際、学生の皆さんに何かとお手伝いに来ていただき、大変ありがたく思っております。本市のスポーツ行事を盛り上げていく、大事な人材を育てていくということで包括連携協定を結ばせていただいたのですけれども、大変心強く思っておりますので、よろしくお願い申し上げたいと思っております。

市内には10の大学がありまして、それぞれスポーツについて熱心に取り組んでおられます。その大学が持っている様々なネットワークやお力、また学生さんたちのボランティアをはじめとして、オリンピックイヤーに向かってさらに絆を深めたいと思い、10大学と包括連携協定を結ばせていただいたところでございます。このように、しっかりと各方面との包括連携協定を活かして努力していきたいと思っております。

これからも、官民一体となって大規模国際スポーツ大会の誘致に全力を尽くす所存でございますが、お二方にもいろいろとご指導賜りたいと思っております。

結びに、大坂なおみさんの全米での優勝には泣けてくるほど感動した1人なんですけれども、もっと感動したのはあの優しいコーチの助言です。今年の前半はスポーツ界で不祥事が続き、「これはどうなっているんだ」と皆さん思われていたかと思いますが、ああいう優しい教え方。千葉さんのお話では、青山学院大学の監督さんもそういう雰囲気をお持ちだそうですね。

千葉氏

そうですね。青学の原監督です。

北橋市長

そうですね。スポーツは皆が見られますし肌で感じられるんですけれども、その世界で次の世代を大事に育てていこうという人にとっては、すごく良い衝撃になったと思うんです。スポーツというのは素晴らしい。いろいろな意味で夢と感動を、大人にも子どもにも与えてくれます。これからも誘致を頑張っていきますので、また、いろいろな楽しい交流の機会もつくっていききたいと思っておりますので、どうぞ皆様、ご参加のほどよろしくお願いしたいと思います。ありがとうございました。

質疑応答

南氏

ありがとうございます。

今、パネリストの皆様の様々な観点から、スポーツによる街の活性化、あるいはそれにとどまらず私たち一人一人の人生を豊かにする、そうした無限大の効果があるというようなお話を頂けたかと思います。

パネリストの皆様方、どうもありがとうございました。この辺でパネルディスカッションは終了しまして、ご参加いただいている皆様との質疑応答に移ります。本日のテーマ「国際スポーツ大会等の誘致の推進について」ということで、皆様からご質問やご意見などを承りたいと思います。発言される方は挙手を頂きまして、初めにお名前とどちらからお越しになられたかをおっしゃっていただければと思います。また、できるだけ多くの方にご発言いただきたいと考えておりますので、ご意見・ご質問は簡潔に1分程度でおまとめいただけますと幸いに存じます。

それでは、ご意見・ご質問がとおりになる方は挙手をお願いします。では、真っ先に挙げていただいた方、お願いします。

男性

千葉さんに質問させていただきます。

私の将来の夢が、トップアスリートの選手にトレーナーとして付いてその選手を活躍させることなんです、そのトレーナーに求められることを教えていただきたいです。

千葉氏

素晴らしい夢をお持ちですね。

実は、私はすごく怪我が多い選手でした。多いときに1日で50 km、60 kmと走るの、月間で1,000 kmを軽く超えるようなトレーニングをしていました。

先ほど市長が「褒める指導」というようなことをおっしゃったかと思いますが、私は小出義雄監督という、高橋尚子さんや有森裕子さんをメダリストに導いた名伯楽にお世話になっていました。彼のすごいところは、言葉の力、コミュニケーション能力にあったのではないかなと思います。

練習は世界一厳しいです。私も一生懸命やるんですが、練習量が多いので、手を抜いていないんだけど走れない、結果が悪いことってあったんです。そんな時、私は一度も叱られたことはありませんでした。横にやってきて「千葉ちゃん、一緒に頑張ろう。」と、目線を合わせてくださるところが私は大好きでした。何でできないんだと叱られたら、私も人間なので拗ねてしまうかもしれませんが、あれだけの実績を残された監督でも目線を合わせて、一緒になって目標に向かっていこうというのが、この人についていきたいなと思いました。監督のチームに入ってすぐに走れたわけではなくて、実は2年半くらい全然結果が出ないときがありました。練習量が多すぎて疲労度が高く結果が出なかったということだったんですが、その時監督に「私はもう少しめりはりを付けたトレー

ニングの方が合うのではないかと思います」と相談をしに行きました。そしたら、メダリストを何人も輩出している名伯楽でありながら、私のような弱い選手の言うことに耳を傾けてくださったんです。

ですから、どれだけ結果を残そうが、選手の思いに耳を傾けて一緒に新しいものに取り組んでいく、つくっていくような柔軟性が、監督の素晴らしいところだったのではないかと思います。そんなふうに、選手とコミュニケーションを取っていかれると、素晴らしいトレーナーさんになれるんじゃないかなと思います。ぜひ、頑張ってください。

男性

ありがとうございます。

南氏

ありがとうございます。そのほか、いかがでしょうか。

では、今ご発言いただいた方の2列くらい前におられる方、お願いします。

女性

今日の話聞いて、スポーツの良さや大切さがさらに分かりました。私は地元就職をしましたが、大きなスポーツ大会がコンスタントに地元開催されると、地元への愛着が増し、街に誇りが持てて、北九州市も元気になると考えています。コンスタントに地元開催するには、何が一番大事かを教えていただきたいと思います。よければ千葉様にご意見を伺いたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。

千葉氏

アスリートの目線から何か絞り出したいなと思います。先ほど市長が、スポンサーが切れそうになった過去があったんだけど、子どもたちのために何とか耐えて続けていかれたというお話をされていました。

私は毎年、山形県の東根市で開催される「さくらんぼマラソン」という大会に参加しています。本当に小さな街なんですけど、街を挙げておもてなしをしようということで、さくらんぼ東根駅という新幹線の駅があるんですけど、そこを降りた途端にホームからおもてなしが始まるんです。ホームに「ようこそいらっしゃいました」という横断幕を持った市民の方がお迎えに来られて、子どもたちが鼓笛隊で歓迎の曲を鳴らしてくれたりセレモニーが始まって、前夜祭に始まり歓迎の花火まで上がるんです。

大会当日は、学校単位で、また街中の方が沿道に出てきたのではないかなというくらい人が多くて、子どもたちも「何々県の皆さん、ようこそ。」という手作りのプラカードを持っていました。例えば、熊本県だとくまモン、千葉県だとピーナッツとか、プラカードにその県のオリジナルのモチーフみたいなものが描かれていて、子どもたちもその県の有名なものについて勉強したんだと思います。あるいは、選手一人ひとりのお名前がレタリングされた大きなプラカードを持っていたりと、走る方は市民ランナーなんですけど、オリンピック選手の気分が味わえるというわけなんです。

そうした学校単位の応援とかボランティアでの参加は、学校とはまた違った素晴らしい学びの場だと思います。青少年に向けてそういう場をつくってあげると、おもてなしというものを学生時代から学んで社会に出るわけですから、大会の継続へとつながっていくのではないかなと思います。私は、いろいろな大会を経験する中で数々の素晴らしい面を見せてもらうんですが、そういったことも1つの継続の力につながっていくのではないかなと感じています。

南氏

ありがとうございました。大変重要なご示唆を頂いたかと思えます。

それでは、まだご発言いただきたい方がいらっしゃるかもしれませんが、所定の時間となってしまいました。以上をもちまして、パネルディスカッションを終了させていただきますと思います。パネリストの皆様方、ご参加いただいた皆様方、どうもありがとうございました。

司会

ありがとうございました。では、ここでパネリストとコーディネーターの皆様には、ご降壇いただきます。ありがとうございました。ご来場の皆様、改めましてパネリストとコーディネーターの皆様に大きな拍手をお願いいたします。

(降壇)

では、これをもちまして、タウンミーティング「国際スポーツ大会等の誘致の推進について」を閉会いたします。本日は、長時間にわたりましてお付き合いいただき、誠にありがとうございました。冒頭でご案内しましたとおり、アンケートの回収を出口で行っております。皆様のご協力をお願いいたします。お帰りの際は、お忘れ物などございませんよう、お気を付けください。

本日は、誠にありがとうございました。